

前 奏 黙想	讃美歌 418	ここに自由と
讃美歌 68	聖餐式	
祈 禱	讃美歌 203	しずけくやすけき
信仰告白 使徒信条 566	献 金	
聖 書 詩編 24:1~2	讃 詠 547	いまささぐるそなえものを
コリントの信徒への手紙一 10:23~26	黙 禱	
讃美歌 267	主の祈り 564	
説 教 『罪も愛も、すべてが自由』	頌 栄 543	主イエスのめぐみよ
祈 禱	祝 禱 後 奏	

宗教改革の二人の巨人は「自由」をとりわけ重視した。両者共にパウロの書簡に依拠し、M.ルターは「キリスト者の自由」、J.カルヴァンは「キリスト教的な自由(綱要)」という文書を著した。

私にとってのイエスは、ハラハラさせられるほど自由。パウロは厳しさが勝って、緊張させられる。16世紀のカルヴァンに至っては「自由だって、ホンマかいな」と訝しむほど四角四面で堅苦しい。ただカルヴァンの個人的な手紙は肩の力が抜けていて、案外素朴な人なのかも。これは要するに、「自由」という言葉イメージが、人により、時代により、地域により、状況によって異なっているからだ。

「[すべてのことが許されている]しかし、すべてのことが益となるわけではない。[すべてのことが許されている]しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない(1コリント 10:23)」。聖霊に関する記述でも、同じように語られている(6:12)。ということは、コリントの教会では「すべてのことが許されている」が旗印であったのか。「許されている」と力を込めて言うことから、「許されていない」さまざまな禁忌との衝突が想像される。「市場で売っているものは、良心の問題としていちいち詮索せず、何でも食べなさい(10:25)」。律法で定められているような禁止食物だけのことではあるまい。それらが宗教的な浄不浄と結びついて、いっそうややこしくなっている現実であった(10:27~29)。

「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの(詩編 24:1)」。まさしく「地とそこに満ちているものは主のもの(1コリント 10:26)」に他ならない。すべてが主のものだから「すべてのことが許されている(10:23)」のだ。「主は、大海の上に地の基を置き、潮の流れの上に世界を築かれた(詩編 24:2)」。今も続く主の創造の中で生きる者には、主なる神に対して「すべてのことが許されている」。

すべてが許されてはいるが、「すべてのことが益になるわけではない。すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない(1コリント 10:23)」。人間は、平和を願いながら戦争し、自然の生命循環を知りつつ破壊している。つまり主のものである「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むもの(詩編 24:1)」を過剰に占有したり、奪い合っている。それでも「すべてが許されている」のか。偉大な宗教改革者たちが命を賭して語り続けたキリストの「自由」とは、いったいどのようなものなのだろうか。

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出された。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい(ガラヤ 5:13)」。私たちは「自由を得るために召し出された」。そして私たちには「すべてのことが許されて」いて、「肉に罪を犯させる」自由も得ている。大きな罪も、些細な罪も、集められておぞましい塊になる民族や国家の罪も、「許されている自由」によって発生する。こうした自由の罪を超えるには、「愛によって互いに仕える(5:13)」より他ない。

私たちは「愛によって互いに仕えよう」とすると己が愛の乏しさに嘆く。嘆かずともよい、人間の愛する能力など五十歩百歩なのだから。仕え合うのは、私たちを捉えている「愛」によって。「たれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができるか(マ 8:35)」。キリストの愛こそ、自由の源泉。

善を為すことも 悪を為すことも すべてが許されている キリストの愛によって悪を為すこともあろう それは神の御心だから 愛は人間の道徳律には納まらない 自由の光に導かれていく御心

本日 2:30~分区分道研修会(南甲府教会)。11/5 の礼拝後に役員会、カレーの日です。11/1(水)1:00~3:00 教会カフェ営業、皆さん気軽に来て下さい。牧師の動き:11/1(水)YMCA で聖書のおはなし。

八ヶ岳教会、礼拝堂と集会所の住所: 408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ: 408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。